

付き合ってもらえないかしら？ おばあちゃんより》

OKの返信をする私は鼻歌まじりだ。だって、心配ごとはもう晴れたから。

三日前、お母さんがマグサリタに復帰した。

「じゃあ、私はレッスンだからお皿洗いよろしくね」  
髪をカットしたお母さんは、さっぱりした顔つきで言った。

「マジで!? ていうか、いきなりどうしたの?」

「頭を冷やしたの。今日美容室に行く途中にね、駅前で外国人に電車の乗り方を訊かれたんだ。そのとき、何とか英語で答えられたのよ。これもクリステイナ先生のおかげだなんて思って、やっぱり英会話続けようって思ったの」

その単純さに、まったくもーと呆れながらも、

「おー、いいじゃん！ その調子だよ、お母さんアメリカに一人旅するって野望もあるんでしょ?」

私はお母さんのやる気の火に薪を投げ込んだ。

これで私も安心してマグサリタを続けられる。

ハロハロパーティーのことはお母さんに内緒のままだ。

もう隠す必要もないけれど、ラッピングしたプレゼントみたいに、自分の内側にくるんでおきたかった。(でも、ジョシユア先生は別。レッスンのとき、友達とハロハロを作ったと報告すると、「Wow」と驚いていた)。

そうだ、おばあちゃんに会ったら、借りていた昔話の本

を返さなきゃ。それに、あのことも話したい。

私はマリアさんが教えてくれたフィリピンの昔話『サルとカメラ』を思い出す。

「昔話の時間、始めるヨー」

マリアさんはタンバリンで合図をすると、ハロハロで使った材料や道具を片づけ始めた。

「昔話っ? おれ、桃太郎も浦島太郎も知ってるし」

ケンくんが言うと、マリアさんはニカツと笑った。

「今日は、フィリピンの有名な昔話ネ」

それってもしかして……。食器やかき氷機をキッチンの流しに運びながら、私は風羽ちゃんに訊いてみた。

「ねえ、もしかして私のためかな?」

「それだけじゃないと思うよ? ケンとエミリは日本育ちで、フィリピンの昔話とか知らないからさ。いいチャンスだって思ったみたいだよ。私もちょっと聞いてみたいし」  
言われてみれば、フィリピンの昔話が日本のアニメや絵本で紹介されることはきつとめったにないだろうな。

フィリピンの有名な昔話ってどんなだろう。ジョシユア先生も知ってるかも。期待が風船みたいに膨らんでいく。

テーブルが片づくのと、マリアさんはノートパソコンで動画サイトを開いた。

「はじまりはじまりネー。タイトルは、『サルとカメラ』」